

1. さて、取税人、罪人たちがみな、イエスの話を聞こうとして、みもとに近寄って来た。すると、パリサイ人、律法学者たちは、つぶやいてこう言った。「この人は、罪人たちを受け入れて、食事までいっしょにする。」。(15:1-2)
 - a. イエスのミニストリーには何か人を惹きつけるものがあったのだろう。宗教関係者だけでなく取税人（国に背いた人）や罪人（神に背いた人）たちも近寄って来た。
 - b. イエスはパリサイ人や律法学者たちがつぶやくのをご存知であった。彼らは自称「善人」であり、神の愛を受けるにふさわしいと思っていた。彼らの考えは「取税人や罪人らはわれわれのように神の愛を受けるべきでない」というものであった。
 - c. 残念なことに現代のクリスチャンの間でも同じような態度が見られる。ところが神の愛はそのようなものではない。イエスはさまざまなたとえを使ってそれを説明される。今日はそのうちの一つを見てみよう。

2. またこう話された。「ある人に息子がふたりあった。弟が父に、『おとうさん、わたしに財産の分け前を下さい。』と言った。それで父は、身代をふたりに分けてやった。それから、幾日もたたぬうちに、弟は、何もかもまとめて遠い国に旅立った。そして、そこで放蕩して湯水のように財産を使ってしまった。(15:11-13)
 - a. これはある人と二人の息子の話である。ほとんどのたとえでは人（父）は神を表すがこれも例外ではない。これは二人の息子に対する神の愛の話である。
 - b. 弟の方は父の生前に遺産を要求する。自分の楽しみのために父の遺産を使い果たしてしまうこの息子は取税人や罪人の象徴である。父親に対する非常にあからさまな反抗である。
 - c. しかしそのような放蕩生活が長く続くはずがない。この弟は非常にひどい状況に追い込まれた。これはしばしば誘惑や罪のパターンでもある。初めは魅力的に見え、我慢できず手を出してしまう。神の御心でないといわかっていながら背を向けて、自分で払いきれない負債を負ってしまう。そして取り返しのつかない、出口のない罪にはまってしまうのである。

3. しかし、我に返ったとき彼は、こう言った。『父のところには、パンのあり余っている雇い人が大ぜいいるのではないか。それなのに、私はここで、飢え死にしそうだ。立って、父のところに行って、こう言おう。「お父さん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。(5:17-18)
 - a. 罪とは面白いもので、恥、嘘、脅迫などの手段を使いできるだけ長く私たちが罪の中にとどめようとする。そしてそれを断ち切るのは私たちが考えるほど容易ではなく、神の恵みなしには解き放つことができない。このたとえ話の中では、神の恵みはすぐにではなく彼が「我に返ったとき」現わされた。
 - b. 弟息子が家に帰ると父親はすぐに彼を抱き受け入れた。父は走り寄り、抱き、口づけし、一番良い着物を着せ、指輪をはめさせ、靴をはかせ、肥えた子牛をほふらせ祝った。これらの行為は一つ一つに霊的な意味がある。

4. ところで、兄息子は畑にいたが、帰って来て家に近づくと、音楽や踊りの音が聞こえて来た。それで、しもべのひとりを選んで、これはいったい何事かと尋ねると、しもべは言った。『弟さんがお帰りになったのです。無事な姿をお迎えしたいというので、おとうさんが、肥えた子牛をほふらせなされたのです。』すると、兄はおこって、家にはいろいろともしななかった。それで、父が出て来て、いろいろなだめてみた。(15:25-28)
 - a. 弟が帰って来てお祝いをしたところで話が終わればよいのだが、このたとえは取税人や罪人だけについての話ではない。不平を言ったパリサイ人や律法学者たちの話でもある。
 - b. 彼らの父に対する愛が本物ではなかったことが明らかにされる。今や彼らが父から遠ざかってしまった人たちとなった。すべての規則に従いながら神に従おうとする人は自己義認することによって自らを神から遠ざけてしまうことがないよう気を付けなければならない。